

## 國際連盟の經驗と國際連合

佐藤尙武

一九二六年九月、時の獨逸政府、それはワイマール憲法下のポピュリスト黨の政府であつたが、之が國際連盟に入を許されて、九月十日の總會で、正式に連盟加入國として、四十八ヶ國の參加國から請け容れられたのである。此日の總會は正さに感激と緊張で沸立つてゐた。當日、連盟參加國を代表して、彼にとつては仇敵である獨逸の代表を迎える爲に行つた、佛國代表ブリヤンの演説は凡そ今日迄に、筆者の聞き得た國際的名演説中の隨一とも稱すべきものであつた。仇怨を忘れて侵略國獨逸の代表者を歓迎した彼の態度は實に男らしく、立派で、聽衆は彼獨特の流暢な、併も力強い演説に魅せられて了つた。本當に平和の鳩が白い美しい羽を廣げてサル、下、レフォルマシヨン(註)の中を、飛んでゐるかのやうに思はれた。いやそれどころでなく、平和といふ貴いものが、誰の手にも掴むこと出来る、身近かのものであるかのやうにさえ思はれたのである。ブリヤンの大演説を受けて立つた、獨逸外相ストレーゼマンの獨逸語の演説も、流石に堂々たるもので、戰敗國とは云え、歐洲最強國の代表者として、今この平和維持の爲の世界機構に加入せんとする獨逸國民の感情を遺憾なく云ひ表はした、立派な態度であつた。斯くして敵國同志

の仲直ほりも出来た。滿揚狂喜と云ふも過言でなく、隨かニュージールランドの代表の如きは、腰掛の上に立上つて、どっ／＼ハラーと連呼し乍ら、ハンカチーフを打振つた程であつた。

(註) サル、ド、レフォルマシヨンと云ふのは國際連盟の初期頃、總會の會場に充てたジェネローヴ市有の建物である。

このやうにして、ヴェルサイユ條約締結後八年目に、獨逸の加入に依つて世界の平和は確立されたと歌羅巴の人達は一ト安心したのであつた。併し其平和も、不幸にして永續きはしなかつた。あの日の感激を味つた國際連盟は、それから僅か五年にして、全世界を震駭させた滿洲事變を迎えねばならなかつた。又其翌々年、一九三三年には、獨逸、ナジ黨の完勝となり、之が全獨を席卷して、ヒットラー政權の確立を見るに至つたのであるが、之も亦十數年の短命で、一九四五年五月、慘めな最後を遂げて了つたのである。

ヴェルサイユ條約と共に誕生した國際連盟はあれ程迄に全世界の平和維持機關として囑望された、世界的機構であつたのに拘らず、何故其使命を完遂することが出来なかつたのであるか、獨逸の連盟加入に依つて、少くとも歐洲の平和は確立され、それがまた、世界平和の核心であるとさえ一般に考えられたのであつたが、遂に第二次世界大戰の勃發を未然に防止することが出来ず、大戰と共に、僅か二十年の命を存じえた丈で、果敢なくも没落して了つたのは何う云ふ譯であるか。我々は今、第二次大戰の産物である、國際連合を論ずるに當つて、此等疑問の根元を掘り下げて其の依て來る所以を糺し、以て、後日の戒めとなす必要がある。

國際連盟没落の歴史を辿つて見れば、そこには種々な原因のあつたことが窺はれる。米ソ兩國のやうな大國が最初から加入してゐなかつたと云ふ事實も、其大きな原因の一つである。又ヴェルサイユ條約以後の歐洲では、英佛兩國

間の關係が兎角圓滑を欠いて、兩國互に嫉視し、不滿を抱き合つてゐたと云ふのが實狀で、歐洲の牛耳を握つてゐた二大國の關係がこのやうでは、到底國際連盟の基礎を鞏固ならしめる上に役立ち得なかつたのは當然である。其他當時の國際連盟は全世界の民衆から充分支持されて居なかつた。つまり世界大衆の中に、深く根を張つてゐなかつたと云ふことも非難の一として擧げられてゐる。

此等の事實は皆、國際連盟の没落を齎した主な原因として夫々重要性を有つてゐることは争はれない處である。併し筆者がもつと、根本的に連盟を弱體ならしめた原因として考ふる處は、此等の事實の外に、國際連盟の參加國各自が、連盟を護り立て、行かうとする上に充分の熱意と覺悟を持つてゐなかつたと云ふことに歸着する。つまり連盟の規約に盛り立てゐた、參加國各自の義務を徹底的に守り通そうとする決意がなかつたことを云ふのである。そして主たる連盟國に此決意が缺けてゐたと云ふ事實は、何としても連盟を没落に導いた主たる原因であつたことは争えない處であるが、併し罪は主たる連盟國にのみあるのではなく、其他の群小參加國も亦、小國は小國なりに、其責任の一半を負はねばならぬ。成る程、前の國際連盟には國際軍の組織はまだなかつた。併し國際軍を持たなかつたとしても、參加國が眞面目に規約の義務を完遂したならば、假令規約を侵犯する者が出た場合でも、強力な國際輿論を動員することは勿論出来たであつたらうし、又實力を以て之を押し、反省せしむることも不可能ではなかつたと思はれる。然るに滿洲事變、エチオピア問題の場合には、そこ迄の發展を見るに至らなかつた。滿洲問題で日本が連盟から脱退した當時、制裁の問題は遂に起らなかつた。成る程エチオピア問題では、ファシスト伊太利に對し國際連盟は經濟制裁を加へたのであるが、之とて充分の効果を擧げる程度のものではなかつた。元々連盟國に規約第十六條の制裁を充分

に實行する丈の決意があつたならば、何も平素から國際軍の備えがなくとも、侵略國を押える位のことは出來た筈である。勿論之には參加國、殊に主たる連盟國の鞏固な決意を必要とするのは云ふ迄もない。此決意なくして制裁が徹底的に行はれる譯はない。

、滿洲事變で國際連盟に楯を突き、國際輿論に逆行して來た日本に取つて、連盟脱退當時、連盟の制裁を免れたことは寧ろ奇蹟と云ふべきで、筆者等は其僥倖を喜んだのである。併し其時から十五年の今日、敗殘の惨めな状態に迄落込んで了はなくてはならなかつたことを考へると、永い目で見て、矢張峻嚴な世界的制裁を受けたことになる譯である。

それはそうとして、然らば連盟の過去の經驗を、今次大戰の結果として新たに生れた、國際連合に當嵌めて見て、何うなるであらうか。國際連盟の主たる加盟國に、連盟規約を護り通す丈の決意が缺けて居たことが、連盟崩壞の主たる原因であつたとするならば、矢張同じ事が今次の國際連合についても云はれなくてはならない。連合の機構が如何に整備されたものであつても、又其憲章が如何に嚴格、緻密なものであるとしても、この機構の加盟者に飽まで憲章尊重の熱意も覺悟もないとするならば、國際連合が國際連盟の没落と同一轍を踏む結果となるのは、蓋し理の當然である。機構其物は機械と同様で、全體としても、又各部分としても、極めて精巧なものであり得るが、併し機械だけでは動かないのであつて、原動力たる石炭があつて初めて、機械が全能力を發揮し得るのである。加盟國の熱意と覺悟は即ち國際連合に取つては、機構全體を動かす原動力である。この原動力があつて初めて國際連合は其與へられたる使命を果し得るのである。

世間の批評家は能く、國際連盟と國際連合の兩者を比較して、後者の優越を説く者がある。筆者も種々の點に於て國際連合の優秀性を認めるのに吝ではない。殊に世界平和維持の見地に於て、連合の安全保障理事會の構成、權限が以前の連盟理事會に比し、大なる進歩を遂げてゐることを認めざるを得ないばかりでなく、連合が國際軍を持ち得ることになつたのは、何としても國際連盟より一步進んだものであることは論のない處である。併し此優越した機構を持つ國際連合にしても、若し其構成國、殊に主要構成國の間に、憲章を維持遵守する固い決意がなかつたとすれば、折角の憲章も死文化し、國際軍も鉛の兵隊と擇ぶ所のないものとなつて了ふであらう。之は國家連合に取つて、最も注意すべき點であつて、連合を生かすも殺すも構成國の決意如何にありと云はねばならぬ。世の國家連合研究者は正さに此點を重視すべきであると考へる。(三二、六、八)